

北京師範大学珠海分校課題研究交流会 京師南奥実験学校参観及び授業実践

学校経営コース1年 大澤一樹

珠海市第十六中学校にて行われた日中院生による課題研究発表は、日中両国の教育課題に対して、教員がどのように考え、どのような手立てや実践をしているかについてお互いに意見交流し知見を深めることができる大変貴重な時間であった。中国でも知識偏重、コンテンツベースの授業や子どもの育成から転換し、コンピテンシーベースの授業を実践し子どもに身に付けさせたい資質能力の育成を望んでいるということを特に感じた。さらに驚いたのが日本で行われている、「総合的な学習の時間」と似たような授業が展開されていることであった。現在の世界はVUCAと言われ、社会は目まぐるしく変転し、予測困難な時代となっている。このような時代だからこそ、子ども達に必要な資質・能力は何かを的確に見極め養っていかなければならないことを再確認できた。

京師南奥実験学校参観では、中国の授業を参観することができた。京師南奥実験学校では教科担任制が実施されており、一人一人の教員が各教科の専門家である。質の高い授業を見ることができ大変参考になった。また、授業の始まりや終わりの挨拶、教員と子どもとのかかわりの様子などから、日本よりも教員の権威が高いのも印象的であった。

さらに京師南奥実験学校において、教職大学院・雲尾教授と一緒に授業実践する機会を頂いた。私は「日本の伝統文化である剣道体験を通し、日本古来の礼節に触れ、竹刀作法を理解する」ことをねらいとし、剣道で授業を実践した。子ども達は最初の方はとまどいながら、教授と私の面を打ち込んでいた。文化的に学校の先生（老子）の頭を叩くというのはいりえないことらしい。しかし、回を重ねるごとに子ども達は思いっきり笑顔で打ち込むようになってきた。京師南奥実験学校の校長先生からも非常に貴重な体験ができたというお言葉を頂くことができた。これまで様々な研究授業を実践してきたが、今回が一番緊張したのは確かである。

日本と中国という国同士のレベルでは様々な課題を抱えている。メディアで報道されることも負の部分が多い。そして私自身も訪中するまでは正直なところ、中国に対していいイメージをもっていなかったのは事実である。しかし、訪中してその考えは180度変わったといっても過言はない。中国の方々はみんな優しく、温かく親切であった。懇親会もとても盛り上がった。グローバル化が叫ばれる中、このような一市民レベル・民間レベルの交流を通し親交を深めていくことが重要であると感じた。現代ではオンラインで簡単につながることはできる。しかしその場の空気感を感じることはできない。やはり実際に行き、その国の文化や人々の営みや生活に触れ、自分の目や耳で確かめることにはかなわない。

教職大学院に進学しなければ、このような貴重な経験を積むことができなかったであろう。できることならまた中国に訪問し、教育や文化について議論し、親交をさらに深めていきたいと考えている。

